

JFTP NEWS

Japan's Friendship Ties Programs



Bridging Japan through Art & Culture



特集

芸術文化で日本との架け橋に

01. JENESYS 2009 参加者 カレル・ベランドレス・ヘンリーさん
02. カケハシ2016 参加者 エーブル (張一博) さん
03. JENESYS 2018 参加者 ナワラ・ハニスさん

【JFTP PRESS】

さまざまな媒体で同窓生の活躍を発信！

2025
05

ISSUE
16
No.



カレル・ベランドレス・ヘンリーさん

Carell Belandres-Henry

JENESYS

- ・ ピアニスト／音楽教師
- ・ 2009年度 JENESYS参加者 (ASEAN10か国＋東ティモール混成招へい)
- ・ 参加当時：高校生

音楽を通じた日比交流の架け橋に

JENESYSが音楽人生の転機に

私は現在、アメリカ人の夫と東京に住み、音楽教師やピアニストとして活動しています。日本に住んで7年以上になりますが、高校生の頃は日本に行くのは老後の夢だと思っていました。しかし、JENESYSのおかげで16歳の若さで来日することができました。

一番印象に残っているのはホームステイです。お父さんが近くの音楽店に連れて行ってくれて、ショパンの楽譜をプレゼントしてくれました。このとき、日本にはフィリピンにない高品質の楽譜や音楽書籍があることを初めて知りました。フィリピンには日本のような音楽店がそもそもありません。この出会いが、後に私の音楽教育の研究につながりました。お別れの日には、私もホストファミリーのみんなも泣きました。たった数日の滞在でしたが、とても深い絆を築くことができました。

日本の音楽大学院へ留学

フィリピンのセントスコラスティカ音楽大学 マニラを卒業した後、2017年に広島のエリザベト音楽大学大学院に進みました。入学試験では、フィリピンに音楽出版社がない現状についての改善案を研究テーマとして提示しました。

JENESYSで音楽店を訪れた時の体験が、このテーマを考えるきっかけになりました。教授たちは感銘を受けてくれて、おかげで私は学校から全額奨学金を提供してもらえました。



広島での学生生活は、日本語がわからない状態からのスタートでした。もちろん論文発表も日本語でしなければならず、とても大変でした。しかし、卒業時には修了研究の学内最優秀者に贈られる「セシリア賞」を受賞し、驚いたとともにうれしかったことを覚えています。

受けた教育の恩を返したい

私は幸運にも奨学金をもらって無償で大学と大学院に通うことができました。フィリピン人として、これまでに受けた教育の恩恵への恩返しをしたいと思います。将来の目標は大きく二つあります。フィリピン人アーティストを日本に招き、大きなコンサートを開くこと。そして、フィリピンに音楽出版社を設立することです。フィリピンは海外から音楽書籍を輸入していますが、自国で制作できれば、手頃な価格で質の高い音楽書籍を手に入れられます。また、私の夢の第一歩として、2024年に「フィリピン東京コンサートシリーズ」を立ち上げました。日本であまり知られていないフィリピン音楽を紹介する活動です。すでに都内で2回開催し、さまざまなフィリピン人音楽家と共演しています。

この活動がきっかけとなり、在京フィリピン大使館の外交イベントに招かれ、日本の皇族の方々の前で演奏する機会もいただきました。私の活動の目的は、音楽を通じて国と国、人と人をつなぐこと。音楽によって日本とフィリピンの架け橋になりたいです。



▲在京フィリピン大使館のイベントでピアノ演奏を披露したカレルさん

エーブル(張一博)さん

Able Zhang



- 東京藝術大学 国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻 博士後期課程在籍中
- 2016年度 カケハシ参加者 (日本語弁論大会)
- 参加当時：大学生



日本の現代アートを盛り上げたい

日本語への情熱からカケハシへ

私は中国出身ですが、高校卒業後に米国に移り住み、大学で現代美術を学びました。英語以外の言葉を学びたいと思い、大学で日本語を勉強し始めて1年ほど経った頃、カケハシに参加することが出来ました。当時は自分の日本語に自信がありませんでしたが、学ぶ意欲は人一倍強くて、日本人スタッフがいる飲食店や美容室に行っては日本語で話しかけていました。今思えば迷惑な客だったと思いますが、そうした熱意から日本語弁論大会の初級クラスで優勝し、カケハシに参加できたのではないかと思います。

日本の人々の内面を理解したい

カケハシでは、観光では知りえない日本人の日常に触れることができました。その国の人の日常は、地元の人と話をし、家に泊まり、一緒にごはんを食べてみないとわかりません。ホームステイではお母さんがカレーをふるまってくれて、日本の食卓の温かさにとっても幸せな気持ちになりました。また、日本は墓地が住宅地や都心のすぐ近くにあり、驚きました。中国や米国では郊外にあることが多いので、死生観の違いを感じさせられました。そうした体験を経て、日本人の内面をより深く理解したいと思いました。大学で日本美術史を学んだことから、伊勢神宮の「式年遷宮」など、日本独自の精神性にも興味を持ちました。



▲カケハシプロジェクトのホストファミリーと

日本をより深く理解するために、多くの日本人と話して、日本語の論文も読めるようになりたいという思いが募り、日本語の勉強により一層熱が入りました。



▲紀南アートウィークの「コモンズ農園」プロジェクト(エーブルさんは左端)
写真提供: 紀南アートウィーク実行委員会 撮影: 下田 学

地域中心の日本現代アートの魅力

英国の大学院を修了後に日本に住み、2023年から東京藝術大学の博士課程で研究しています。研究テーマは「地域アートプロジェクトにおける参加型体験が鑑賞者の能動性に与える影響について」です。日本の現代アートは、欧米と違って地域のアートプロジェクトがとても盛んです。私がスタッフや研究者として何度も関わっている和歌山県の「紀南アートウィーク」は、地元住民とアーティストが一緒になってアイデアを出し合いました。地元住民が子供の頃から見慣れている景色の中にどんな新しい発見をし、日常生活に何を持ち帰られるかが重要です。現代アートは一部の専門家による高尚なものではなく、日常の中で感じられるもの。それが、私が日本にいて実感していることで、日本で現代アートを研究し続けたい理由の一つです。

中国、米国、英国、日本と住んできて、それぞれ良いところがありますが、長く住みたいと思うのは日本です。大学生から学び始めた日本語も、今では日本語能力試験のN1に合格するまでになりました。日本でキュレーター・アーティストとして活躍し、地域のアートプロジェクトを盛り上げることが私の夢です。



ナワラ・ハニスさん

Nawwarah Hanis

JENESYS

- ・ 在シンガポール日本国大使館 ジャパン・クリエイティブ・センター
ユニット副チーフ(イベントチーム)
- ・ 2018年度 JENESYS参加者(日ASEAN学生会議)
- ・ 参加当時:大学生

日本とシンガポールを文化でつなぐ

JENESYSで視野が広がった

私は昔からすごく日本に興味があったわけではありませんでした。だからこそ、JENESYSのことを偶然インターネットで知ったときは、これまであまり知らなかった日本について知ることができるチャンスだと思いました。

私が参加したJENESYSのグループテーマはジェンダーでした。特に印象深かったのは、日程最後の成果報告会に向けてプレゼンテーションの準備をしたときのことです。グループのメンバーの出身国がバラバラな中で、みんなの意見や考えがきちんと反映されるように発表内容を調整するのは大変でしたが、一緒に課題を乗り越えたことでより深い絆が生まれました。彼らとは今でも連絡をとる仲です。このときに、国同士の関係をより良くしていくことがいかに重要かにも気づかされました。

再びつながった日本との縁

帰国後、大学卒業前に新型コロナウイルスが流行し始めました。私は芸術大学の出身で劇場に興味があったので、卒業後にフリーランスのステージマネージャーとして働



▲ASEAN諸国等と日本からのJENESYS参加者と訪れた雷門の前で(ナワラさんは後列右から3人目)

き始めましたが、コロナ禍の影響もあって仕事にやりがいを見出すのは難しい状況でした。そんなときに友人から、シンガポールで日本文化を発信する拠点である「ジャパン・クリエイティブ・センター(JCC)」のイベントコーディネーターの募集があることを教えてもらいました。応募はしたものの、他にも志願者がたくさんいたので、正直受かるとは思っていませんでした。それでも、面接ではその当時の私にとって唯一の日本体験だったJENESYSのことや、私の甥っ子がウルトラマンを大好きなことなどをアピールして、採用してもらうことができました。

日本各地の魅力を発信したい

JCCで働いていて思うのは、日本のさまざまな魅力を発信することの大切さです。私はSNSのコンテンツ作りを担当していますが、全ての都道府県について多くの人に興味を持ってもらうことを心がけています。また、日本各地の自治体からプロモーションのためにJCCでイベントを行いたいとお声がけをいただきます。最近、シンガポールでは日本を旅行先として選ぶ人も多くなっています。JCCはさまざまなイベントを通じて、日本には訪れるべき場所がたくさんあること、そしてポップカルチャーのみならず伝統文化やアートなど多様な文化があることを伝えていきます。私自身、仕事を通じてシンガポールと日本が良い関係にあることを実感しますし、誰もが日本に行って日本人と交流してみたいと思います。来年は日本との外交関係樹立60周年にあたるので、盛大にお祝いするイベントも行われます。私自身もそうしたイベントに関わることを楽しみにしています。



▶JCCの同僚とイベントでの一コマ

さまざまな媒体で同窓生の活躍を発信しています！

JICEでは、さまざまな媒体で対日理解促進交流プログラムの同窓生たちの活躍を発信しています。JICEが運営するFacebook・InstagramではSNSの発信力を活かし「Hello from Alumni（愛称：ハロアル）」と題して、同窓生の近況などを英語の記事で紹介しています。

また、本誌「JFTP News」では、プログラム経験を生かしてさまざまな活躍をしている同窓生たちのストーリーをより丁寧に紹介しています。「日本で留学生として学ぶ同窓生」「JETプログラムで再来日した同窓生」などのテーマごとに特集し、プログラムへの参加が彼らの

人生にどのような影響を与えたのかを、より多彩な視点からお届けしています。また、日本国内で活躍する同窓生の動画や、同窓会組織の活動報告をSNSで発信中です。

JICEでは、同窓生のあなた自身やお知り合いの同窓生の情報を大募集中です。

「私、最近こんな活動をしています」「あの参加者がこんな活躍をしています」など、どんな情報でも大歓迎！ぜひJICEまでお知らせください。



連絡先：JICE国際交流部FUチーム jftp_followup@jice.org

ハロアルが読めるJICE国際交流部のSNSはこちら



Facebook



Instagram



https://www.facebook.com/jice_exchange



https://www.instagram.com/jice_exchange

編集後記 - Editor's Note-

「JFTP News」制作こぼれ話 その二



前回に続き、JFTP Newsを発行するまでについてご紹介します。今回は取材について。多くの同窓生は日本ではなく海外に住んでいるため、基本的にZoomなどのオンラインツールを活用してインタビューをします。訪日中や日本在住の同窓生には直接会ってお話を伺うこともあります。今号に登場した同窓生の中には、JICEのオフィスで取材させていただいた方もいます。お越しいただきありがとうございました！

同窓生から、プログラムへの参加がどのような影響を与え、どんな転機になったのかを聞くことは毎回とても楽しく、また皆さんの日本愛に日本人としてとてもうれしい気持ちになります。会話が深くなるうちに「どうしたら日本に留学や就職できるのか」「日本に住んでいてこういうことに困っている」といった悩みを聞くことも。JICEは同窓生の皆さんが日本とこれからも長くつながっていけるよう、サポートしてきたいと思います！



一般財団法人日本国際協力センター（JICE）は、主に日本国政府や地方自治体、企業からの依頼に応じ、世界各国の社会開発課題に資する人材育成のお手伝いや日本についての理解を促進する事業を展開しています。

JFTP News 第16号 2025年5月30日発行

編集・発行：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）国際交流部
EMAIL: kokusaikoryu@jice.org

JICEについて詳細はHPをご覧ください。
<https://www.jice.org>

●本誌掲載の記事、写真などの無断転載を禁じます。
©2025 JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

